バラ色の未来

真山仁の 2017 年 2 月刊行の小説。「カジノ万博」に関心があるので、図書館で手にとった。カジノという賭博を考えるうえで参考になる。

本書の筋立てを簡単に紹介しよう。―「IR」という名のカジノ誘致をめぐる政治とメディア、双方の泥臭い駆け引きをリアルに描いた、架空のドラマ。誘致の先を走るのは「地方再生」をカジノに賭ける、青森県円山町。その鈴木町長は IR 指南役と言われ、時の松田総理にまで影響を及ぼす。それに対抗するのが、総理の出身地である山口県関門市。国際的に名だたるカジノ業者の策略、松田総理の寝返りにより、関門市に軍配があがる。

ある事件を追うなかで、こうしたカジノ争奪に伴う疑惑に迫っていくのが、東西新聞のベテランと若手の記者たち。厚い壁を徐々に突き崩していく地道な取材、「調査報道」の展開も興味深い。

架空のドラマとはいえ、松田総理と妻の「人物像」などは、現実の世界を思わせる。派手な総理の妻がカジノに溺れ、莫大な借金を抱え、そこに業者がつけ込み、IR 誘致が決まる。「一強政治」と政治の私物化、メディアなど。

第九章「業火」で、本書のタイトルにかかわる場面がある。「カジノ疑惑」を追う、東西新聞の記者たちの会話である。

そこで佐々木が挙手した。「あの、このところずっと思っているんですが、この大キャンペーンって、未来がバラ色だと勝手に決めつけて、欲望に溺れた挙げ句に破滅した人間の愚かさを暴くのが目的ですよね」

「もう少し分かるように説明しろ」

「IR 誘致とか言ってますけど、結局、円山町民や青森市民は皆ぼろ儲けを目論んで、大きな損をした。何の保障もないのに、見たこともないバラ色を見た気になって我を忘れた。一方の関門市の方も、せっかく IR ができたのに、国際会議場稼働率は年平均で 30%以下、カジノもこのところ来場客減が続く一方で、地元でカジノに興じた多くの人が依存症に悩み、遂には自殺者まで出てしまった。

地方再生政策の知恵袋であり、IR についての指南役でもあった人物を裏切ってまで、地元に IR を誘致した総理は、今窮地に陥っている。誰も彼も、IR に踊らされ、欲望に沈み、不幸になっている。その元凶にあるのは、各人が勝手に思い込んだ『バラ色の未来』という幻想ですよね」

「佐々木、それをタイトルにしよう。特集『バラ色の未来』だ。バブル経済崩壊であれだけ痛い目にあっても、性懲りもなくカネの幻想に踊らされ、一攫千金を夢見てそして命まで失う。それでもなお、読者は、バラ色の未来を信じるのかと投げかけてみよう」

北原の提案に全員が頷いた。

（2018 年 8 月 30 日）